

## 火 城

(幕末廻天の鬼才・佐野常民)

高橋克彦 著

著者は、「緋い記憶」で直木賞を受賞し、「炎立つ」「火怨」などの歴史小説の他、ミステリーや時代小説など幅広いジャンルで活躍する作家である。今回紹介する本は小説であるが、300年にわたる徳川幕府から明治新政府へと大きな変動を見せた幕末に「技術立国」を目指した佐野栄寿（後の常民）の若き日の物語である。

ペリー来航をはじめ、外国船が頻々に出没した嘉永年間、科学は思想に勝ると、この時代において明確に意識していたのは佐賀藩の鍋島直正（後の閑叟）と薩摩藩の島津斉彬であった。特に、直正は日本の生き延びる道は科学技術の導入にあると看破していた。

代々長崎の警備を任されていた佐賀藩には外国の情報が他藩とは比較にならないほど多く流入していたので、藩主の直正は、科学技術の導入こそが来るべき新時代を先導するものだと見抜いていた。単に外国の武器を購入するだけでは軍の一部を増強するに過ぎない。全体を洋式化するには、是非とも藩内にて全てを調達する以外にないと考えた。そのために、藩内から優秀な人材を選び、京都、長崎、大阪、江戸へと莫大な藩費を投じて技術者の養成を行った。そして、永寿ら佐賀の若い才能たちは、直正の命を受けて科学技術の習得に奔走するのである。

京都に上がった永寿は、当時江戸で3大蘭学者の一人である坪井信道門下の鬼才広瀬元恭に就いて蘭語と舎密（化学）を学んだ。その後、大阪では緒方洪庵の指導する適塾、江戸においては、伊東玄朴の塾で様々な知識を身につけた。京都では、広瀬元恭を通して機巧堂の田中儀右衛門（からくり儀右衛門）と巡り合い、その功

績から儀右衛門の技術の方向性を高く評価していた。

ペリー艦隊の蒸気船が浦賀に来航していた頃、長崎に入港したロシアのプチャーチンの艦隊を観察して永寿は、蒸気船が曳船や通報艦として利用されている状況を鋭く見抜いていた。日本の防衛体制は長崎港の砲台を一段と強化し、それまで通り春から秋にかけての半年間の護りを固めておけば一応事足りていた。しかし、蒸気船の出現により、長崎では高島秋帆によって、洋式の軍事訓練が開始され、長崎港防衛の任にあった佐賀藩は、反射炉を築き、鉄製大砲の製造に苦心を重ねることになる。そして嘉永3年（1830）全国に先駆けて反射炉を築き、鉄製大砲の製造に一応成功を収めた。佐賀藩は、海岸砲台の強化に続いて、新たに浮上してきた蒸気船への対策の必要性を痛感するようになり、蒸気機関の試作・研究に早く着手する必要に迫られた。そこで、永寿は、蘭語に達者な石黒寛二、火薬の知識に詳しい化学者（舎密家）の中村奇輔、それに蒸気機関に強い関心を示している儀右衛門に誘いの言葉をかけ、火薬の研究、蒸気船や蒸気機関の模型の製作、電信機の実験、写真の撮影、ガラスの製造など、最先端の技術を次々と手掛けて成功を修めた。

永寿は、蘭学者としてその学識が高かったばかりでなく、積極的な実務家タイプで、新しい事業に対してきわめて熱心で緻密な計画のもとに最後までやり抜く忍耐力を持っていた。

「火城」とは、陣の周囲に松明を並べて防壁となすことである。火とは先を照らす灯りでもある。佐賀は、先を照らす人間を集め、それぞれが松明となって佐賀を、いや日本という国の城壁を支えたのである。大砲も火なれば蒸気も火。永寿は、同じ火であるなら蒸気の火でも国を守れぬはずがないと考えたのである。

(文春文庫、文庫版、349頁、740円) (長田利彦)